

仏教からみた持続的組織論

佐々木 閑 花園大学文学部仏教学科教授

きょうは医学系の先生や学生がたくさんおられるようですね。私も理系の学部を出た人間ですが、いまはインド仏教を専門にしております。医療は死にゆく人間を死なないようにすることが目的ですが、かといって仏教は死んだ人間のあとをどうするか趣旨だと思われると困るのです。日本の仏教は死んだ人間をどうするかが大きな役割になっていますが、もともとの仏教は死んだ人をどうこうする宗教ではございません。

ほんらいの仏教ではない日本の仏教

ほんらいの仏教、つまり釈迦のつくった仏教は、お葬式にはいっさい関わらないのが原則です。タイやスリランカなど、釈迦の流れを汲む仏教のお坊さんたちは、いまでもお葬式には直接は関わりません。あくまでも、生きている人間はどう生きるべきかを考えます。ただし、「人は死ぬものだ」という前提でものごとを考える点で、医療とは違います。「死なないようにするにはどうしたらよいか」を考えるのではなく、「死に向かう数十年の人生をどうしますか」と問題提起する。そういう人の生き方を考える宗教です。

日本のお寺では、ほとけさんの前で手を合わせて念仏やお題目を唱えたあとは、死んだらどこに行けるかというような話ばかりです。釈迦の仏教はそうではないのです。そこで、仏教からみた持続的組織論について考えてみました。

仏教というのは、じつは決められた骨組みの上でできあがっている一定の組織です。ただし、日本の仏教には教団はあっても組織はありません。日本の教団はお坊さんの一種の職業ギルドで、ほんらいの仏教の組織とは異質なものです。

仏教の組織はサステナブルです。古代インド以来、2,500年も続いている実績があります。釈迦が設計図を最初に書いて、いまもその設計図のとおり運営されています。ですから、黄色い衣を着たタイやスリランカのお坊さんたちは、単独で托鉢したり修行したりしているわけではありません。一挙手一投足のすべて、規律に基づいて生活しています。してはいけないこと、しなければいけないと決められた数千項目を2,500年にもわたって守っている組織です。持続的な、サステナブルな組織なのです。

仏教の大枠と釈迦の思想

仏教という組織には特別なコンセプト、方針があります。「自

分のやりたいことだけをやって人生をまっとうする」、これがこの組織のコンセプトです。やりたいことはしないで、自分の生きがいを追求するにはどうすればよいか、そういう課題設定から生まれたのが仏教の組織です。

仏教を定義する三宝が「仏法僧」

ふつうならば、そんな組織は続かざるがたいなのです。私は仕事をしたくない、やりたいことだけをやる。でも、ご飯は食べる。ふつうなら許されない虫のよい話ですが、これを可能にする方法を考えたのも釈迦です。私たち日本人は、釈迦という人物をありがたい教えを説いた宗教家としかみていません。しかし、釈迦のもう一つの功績は、そういった組織を設計した点にあるのです。お釈迦さまは、組織の設計者なのです。では、どのような組織で、どのように機能するのか。

そのまえにまず、仏教の定義です。「仏教ってなんですか」とたずねると、日本のお坊さんからはいろいろな答えが返ってきます。心のなんとか、生き方のなんとかと……。それはそれでよいとして、世界のどの仏教の教団へ行っても、「そうです、間違いありません」と言われる共通の正解があります。それが「仏と法と僧」です。仏教の三つの宝なので、「三宝」ともいいます。聖徳太子が十七条の憲法のなかで「篤く三宝を敬え」、つまり仏教を敬えとおっしゃった、その三宝です。これが定義です。

神でも予言者でもない「仏」

簡単に説明しますと、「^{ぶつ}仏」とは「ほとけ」をさします。ただし、日本の仏教でいうほとけとは違います。これが問題です。日本のお寺には、阿弥陀如来とか大日如来、薬師如来など、たくさんのほとけがいっしょにいます。如来は、ほとけの意味です。如来以外にも、菩薩とよばれる仏像もあります。観音菩薩や地藏菩薩がそうです。日本人は菩薩も如来も同じほとけだと思っていますが、違います。悟りを開いて人びとを教え導く最高位に立った人がほとけです。菩薩は修行中の身で、いまだほとけになっていない人のことです。ですから、菩薩の位は下です。

日本のお寺には、如来や菩薩が山のようにいます。千体のほとけの名前を列挙しただけの「千仏経」というお経もあります。

しかし、2,500年前の仏教には、ほとけは釈迦だけでした。あとはすべて後代につくりだされたほとけです。ですから、ほんらい「仏」といった場合は、釈迦という一人の人間をさします。そのほとけは神ではありません。キリスト教やイスラム教の神さまとは違いますし、イエスやムハンマドのような神の言葉を伝える予言者でもありません。釈迦は、神の言葉を伝

える人でないばかりか、神などいないと明言した人です。人である釈迦をリーダーとして信頼する宗教

では、釈迦はなにをした人か。人びとはこの苦しい世界で一生を送っているが、心で感じるそういう苦しみを取り除く生き方を見つけだし、われわれに説き広めた人です。それが釈迦の姿です。日本人が知らないだけで、スリランカやタイでは、みんな知っていることです。釈迦はそうようにわれわれと同じ人間として、人生の苦悩を取り除く生き方の発見をめざしたのです。それを人びとに教え広めて指導した。一種のインストラクターの働きをした人。これが「仏」です。

ですから、仏教はイスラム教やキリスト教のような一神教的な、不思議な能力のほとけを拝む宗教などと思ったら大間違いです。リーダーとしてのほとけを信頼する宗教なのです。

釈迦が説いた「法」と修行者集団の「僧」

次の「法」がたいへん難しい。ここでの「法」は、釈迦が私たちに教えてくれた内容をさします。これが「法」の定義です。リーダーとしてのほとけが説き残した教えがお経です。そのお経に書かれた言葉が「法」で、それを信頼してついてゆくのが仏教徒なのです。

次が「僧」です。釈迦は、「苦しいこの世で私たちはどう生きればよいか」を私たちに提示し、指導してくれます。すると、これに従う人は、その教えに従った生活を送らなければいけません。頭でわかるだけではだめで、釈迦と同じようなライフスタイルを取り入れて生活せよというのが釈迦の教えです。それは、出家して修行僧、修行者になるということです。そうすることが、厳密な意味で釈迦の教えに従うことになります。

修行するお坊さんのコミュニティ＝サンガ＝僧

そうしますと、「仏教がある」ということは、その場所に釈迦の教えに従ってライフスタイルを変えた人たちの集団がなければなりません。お坊さんのコミュニティがそこに現れるはずで、そのお坊さんの集団のことをサンガといいます。集団、集まりという意味です。そのサンガという言葉が中国語に音写したのが僧伽^{そうが}という漢字です。

ですから、このサンガという言葉そのものが、修行するお坊さんたちのコミュニティをさします。この僧伽という文字を省略して1字だけを使ったのが「僧」のはじまりで、「僧」はお坊さんの集まりを意味します。ただ集まっているのではなく、修行を目的に出家したお坊さんが、特定の規則に基づいて、釈迦の教えに従って暮らしている。その整然とした生活スタイルの情景のことを「僧」といいます。日本では間違っ、お坊さんを指す言葉になっていますが、ほんらいはお坊さんの「集団」をさします。人数も最低4人と規則で決まっています。

サンガの構成メンバーは、①優婆塞、優婆夷（在家信者）、②沙彌、沙彌尼（見習い）、③式叉摩那（女性だけに課せられる見習いの第二段階）、④比丘、比丘尼（正式メンバー）です。

男のお坊さんは「比丘」、女のお坊さんは「比丘尼」です。男のお坊さんが4人以上集まって暮らしているコミュニティのことを「比丘僧」「比丘サンガ」、女のお坊さんのグループのことは「比丘尼僧」「比丘尼サンガ」とよぶのが正式な呼び方です。

そして、一般人が沙彌、沙彌尼になることが「出家」。さらに進んで比丘、比丘尼になることを「受戒」といいます。ただし、この二つをまとめて出家とよぶこともあります。

サンガを拒否した日本の為政者

以上三つの要素、つまり「仏法僧」が完備してはじめて、「仏教がある」ということになります。釈迦を信頼し、その教えを受け入れ、その教えどおりに修行生活をしているコミュニティがあれば、「仏教がある」。逆に、これが抜けていたら仏教はない。残念なことですが、日本にはこれがありません。奈良時代に日本が仏教を導入したときに、自治集団としてのサンガ、すなわち「僧」は政治的に排除されたのです。

日本の仏教は、朝廷が国の宗教として導入しました。人びとを助けるために導入したわけではないから、自治組織などが入ってもらいと困る。全員が国の支配下にいないと困るから、自治権が保証されているサンガを導入しなかった。それ以来、日本の仏教はサンガのない宗教になりました。

世界には多くの仏教国があります。大乘仏教と小乗仏教——いまは上座部仏教といいますが、この二つに大きく分かれます。スリランカ、タイ、ミャンマー、ラオス、カンボジア、ベトナム、それに中国の一部ですがチベット。そして中国、韓国、台湾、日本です。それにいまは、膨大な数の仏教徒が西欧と米国で生まれつつあります。アメリカだけで300万人の仏教徒がいます。しかし、その仏教国でサンガのない仏教は日本だけで、ほかはすべてサンガという組織に基づいた生活をしています。

以上が大枠です。これから簡単に釈迦の時代に戻って、仏教が生まれた経緯と、それによってできたサンガという組織の内実について少しずつお話をしようと思います。

お釈迦さまと仏教の悟り

インドで仏教ができたのは2,500年前。創始者の名前はガウタマ・シッダータといいます。悟りを開いたあとのこの人が仏陀とよばれるようになります。このガウタマ・シッダータは王族の一員として生まれた皇太子で、その一族の名前をシャカといったのです。そのシャカ族の王家に生まれたガウタマ・シッダータが悟りを開いて仏陀になります。

仏陀というのは目が覚めた人、悟った人という意味です。その仏陀はシャカ族の立派な人という意味の釈迦牟尼とよばれるようになります。牟尼は聖人とか立派な人という意味です。しかし、そのうちに牟尼というのが面倒なので、「お釈迦さま」になりました。ですからすべて同一人物をさします。

お釈迦さまの世界観

では、お釈迦さまは世の中をどのように見たのか。基本的な世界観は、「生きているすべてが苦しみである」です。「楽しいことだってあるじゃないの」と思うかもしれませんが、生まれてから死ぬまでの人生は基本的にすべて苦のうえになりたっている。その苦を忘れているとき、あるいはその苦が多少とも軽減されていると感じるときを相対的に楽しみ、楽とよぶのであって、基本はすべてが苦だというのが釈迦の世界観です。

では、人生はなぜ苦のうえに乗っているのか。それはわれわれが生物だからというのです。生物は生きている以上かならず死ぬ。寿命がわかっていて、その寿命を一つずつ消費しながら、死に向かって一歩ずつ近づいてゆくのが生き物である。しかも犬猫とは違って、人間は自分が一歩ずつ死に近づいていることを予測する能力をそなえている。だから、よけいに苦しい。

ネコやイヌはたぶん、なにも考えずに暮らしていて突然死ぬ。それなら楽かもしれません。残念ながら人間はすばらしい脳をもっているせいで、未来を予測する能力をそなえている。まだ死んでいなくとも、死ぬことを了解してしまう。しかも統計的にももの考える能力もありますから、私も80歳、90歳くらいで死ぬだろうと予測して生きる。それが苦しみの原因です。120歳まで生きる可能性はゼロだと思いながら一日一日を暮らしている。死ぬことにもまして、死に向かって近づいているという自覚も苦しみになります。それが老です。

三つの苦しみの上に乘った人の一生

死と老化以外にも、私たちには避けられない苦として、病があります。したがって、私たちの人生は三つの苦しみの上に乗っていることになります。歳をとり、病気になり、死ぬという苦しみです。これを釈迦は、人間には避けられないものだと考えました。三つとも、だれもが嫌なものに決まっています。しかし、避けられない。だから、人生は本質的に苦であると。好きな人ができて結婚しました、家を建てましたなど、いろいろな楽しみがあります。けれども、老・病・死という三つの苦しみの上においた場合には、それは相対的な喜びにすぎない。家が建ったからといって死の苦しみから逃れられる人はいないのです。

では、これにどう対処するかです。対処の方法には大きく分けて二つあります。一つは、死ぬのは苦しいのだから、死なないようにすればよいという考え方です。この考えのもっとも合理的な方向が医療、医学です。死の苦しみ、死の恐怖から逃れるために、死そのものを遠ざける。あるいは、死そのものを消滅させる。その合理的な道が医療です。しかし、これが間違った方向に走ると、呪術やまじないの世界になります。

その一環として、「死んでも死なない」という考え方があります。これもわれわれを救ってくれます。死んでも同じかたちで生まれることがありますよという考え方です。エジプト

のファラオの再生などもそうです。だから、お墓にたくさんの物を埋めて、蘇ったらもう一度使おうと考える。

悟りに導く釈迦の教え

釈迦はそうは考えません。人は死も老化も避けられないという前提に立ちます。人為的な方法では消滅させられない、受け入れるしかないと考える。そのうえで苦しみを解消する方法を考えた。これが悟りです。

釈迦は、死を受け入れる私たちの心そのものを変えようと説いたのです。自分の力で、心の鍛錬によってももの考え方、受け取り方を変える、自己改造する。そういう道があると釈迦は説いた。この話をする、「そんなことができるんですか」ときかれます。私は、「できるもできないも、いまのあなたがその結果です」と答えます。みなさんはいま、私の話をまじめに聞いてくださっているし、この会場でとつぜん踊りだしたりする人もいない。でも、みなさんが生まれたままで、教育も与えられずに育っていたらどうなっていたか。たぶん、洋服は着ていないし、こうしてまじめに人の話を聞くこともしないはずで。

それは、みなさんが後天的に教育された結果です。親や学校や、いろいろな人から手本を見せてもらい、あるいは叱られながら生き方を教育してもらった。そういうトレーニングの結果、一人ひとりがすべて社会的な存在として暮らしています。人間の恐るべき自己トレーニング能力です。そうして人間社会で過不足なく生活できる状態に達したら、その人のトレーニングは終了です。本人も、周りもそれでよしとします。

しかし、釈迦がめざすのはその先です。社会の人間としては充分でも、そこで留まったのでは老病死の苦しみに耐えきれない。苦しみを苦しみと感じてしまう状態で止まっている。ですから、さらに厳しいトレーニングを課すことで、その人をもう一段高く変えましようとするのです。

サンガの誕生と修行のシステム

一般の社会のなかで、ふつうの価値観で暮らしている人には、釈迦のトレーニングは無理です。いまのままでよいと評価してくれている社会で、もう一段上に上がるのは困難です。そこで釈迦は、もう一段上のトレーニングができるような特別な社会を一般社会のなかにつくことを考えたのです。私は鳥社会とよんでいます。

釈迦が考えた仏教の基本的な設計図

その鳥社会は、世俗の価値観に縛られて生きる平均的な人間は落第だと評価する世界です。人間は心をもう一段改良すれば、老病死に耐えられる人間になる。ですから、老病死を苦しみや恐怖と感ぜない人間になれば合格だという特別な社会をつくり、そこで日常とは違う特別なトレーニングによって自己改造

を進めることが必要だ。これが、釈迦が考えた仏教という宗教の基本的な設計図です。

この修行の内容は組織論とは少し離れますから、概略だけ説明しておきます。私たちの心には、老病死を受けると強い恐怖心、苦悩が生まれます。その心のシステムを自分自身でよく理解し、観察し、把握したうえで、自分の心と環境を変える努力を続ける。それが修行です。とはいえ、自分の心を変えても環境に左右される要素が強くなります。そのようなことが起こらない生活のシステムをつくり、そのなかで暮らす。それが悟りに向かう修行の基本です。執着が強いと死の苦しみは増すからです。

つまり、この世にたくさんの物を所有し、たくさんの物に囲まれ、そのすべてを失いたくないという思いが強ければ強いほど、それを失う死の苦しみは倍加します。逆に、修行によってこの世の物に執着しない自分をつくる。執着するような物を周りに置かない生活にする。いくら心を変えようとしたって、目の前に金の延べ棒があったら、やはり執着します(笑)。環境と自己のあり方、心のあり方を自分の力で変える。これが可能な社会を共同体としてつくることで課題を乗り越える。これが釈迦の考えた仏教の基本的な設計図です。

集まった 1,250 人の弟子との集団生活

仏教にはありがたい教え、心に響く言葉があります。それを一人ひとりが心に刻みこんで毎日を送ることは必要です。同時に、そういう社会をどう実現するかも大切です。ありがたい教えも必要だが、島社会をどうつくり、どう維持するかが、じつは重要な課題になるのです。

釈迦は、木の下に座って半眼で修行し、悟りを開きました。それが仏像の姿です。悟りを開くまで心の改造をくり返しました。なにかの拍子にパッと悟ったなどという話がありますが、一瞬で悟ることはありません。釈迦であろうが、だれであろうが、集中的に修行をくり返すことで少しずつ進歩し、自分が変わってゆく。それが万人に共通する悟りの道です。

釈迦自身、何年もかけて修行しました。当初は一人だけの修行ですから、あたりの物を適当に食べていたのでしょう。ぼろぼろの衣のまま何年間も過ごしたに違いありません。そうして悟りを開いて仏陀になったあと、いかにして老病死の苦しみから逃れることができたかを多くの人に説きました。すると、釈迦の教えに共感する人たちがどんどん増える。これが弟子です。伝説によると、1,250 人が最初に集まっています。多くの弟子が集まり、仏教の歴史にサンガが登場することになるのです。

釈迦は弟子に「私はこのやり方で、このような心持ちで毎日をすごした結果、悟りを開くことができた。自分の苦しみを消したいと思うならば、みなさんも私と同じ道を歩かなければなりません。あなたの代わりに修行してあげることはで

きませんが、道筋をみなさんに教えることはできます。私と同じ道と一緒に進みましょう」、こう言ったのです。

働かずして食べるための方策

釈迦の道は、ひたすら自分の心の改良を人生の目的として何年も何年も座するというものです。座るとは瞑想すること、集中して考えることです。数学者が世紀の大問題を解こうと20年、30年考え続けるのと同じような姿勢です。「そうしなければ問題は解けないよ」と釈迦は言ったのです。集まった1,250人が、みんな木の下に座る。しかし、ひたすら瞑想を続けている人間に、ほかのことはできません。食べてゆけない。1,250人の弟子を抱えて、その弟子に「仕事をするな、瞑想せよ」と言ったものの、その1,250人をどう食べさせるのか。

アイデアはいろいろ浮かびます。山に入って、採っても怒られないような木の実や草の根などを食べるのはどうか。でも、1,250人もの食糧ですから、へたをすると朝から晩まで採らなければならない。そうすると仕事です。では、道ばたに落ちていた物を拾って食べるのはどうでしょうか。2,500年前のインドは、道ばたにご飯が落ちているような世界ではありません。

1,250人全員が仕事をしないで生きる方法の一つしかない。他人が食べた残り物や捨てる物、余った物を分けてもらって食べるという方法です。すると、仏教の修行者は余り物の出る場所であれば修行ができない。余り物の出る場所は都会です。これでやっと安寧の都市と少し結びついてきた。(笑)

仏教は都会宗教です。お坊さんは都市の近くに住みます。この点でも日本の仏教は、釈迦の仏教とは違います。山中で一人で霞を食べて修行する、そんな仏教はどこにもありません。自分で畑を耕して食べたらどうでしょうか。それは農業というひとつの仕事です。これまた出家ではなくなります。

道は一つしかない。都会のそばに住んで、そこから出る残り物をもらって歩く。釈迦は弟子たちにこう言いました。「おまえたちは全員、夜が明けたら一軒ずつ家を回って頭を下げ、残った物をもらって歩け」。お坊さんの托鉢は、こうしてできたのです。京都でも見かけます。鉢をもった禅宗のお坊さんが菅笠をさして「ホォーイ」と呼びながら歩きます。あの托鉢こそが、釈迦が弟子たちに教えた食べる道です。

修行者であることが一瞥してわかってもらう工夫

しかし、鉢をもっているだけでは信用してもらえません。家庭の主婦の立場で考えるとわかります。朝、ご飯を用意していると人がやってくる。お釈迦さまの時代のインドには仏教以外にも宗教が山ほどあって次々に修行者がやってくるが、家庭の主婦にはそんなにあげる物はない。やはり、気に入った人にあげる。修行者、出家者としてまじめにやっている人にあげたい。仏教のお坊さんも、「私はきちんとしています」ということを見せてはじめて、ただでご飯がもらえるのです。

では、どうすることがきちんとしていることになるのか。「き

ちんとしてしていること」の指標はなにか。そこで、髪を剃って髭を剃ったのです。当時のインドでは、人ならぬ姿、恥ずかしい姿です。それなりの覚悟がいります。社会的な身分を捨てた非社会的な人間、アウトサイダーであることを示すには、たいへんな覚悟がいります。その覚悟を示すことが、本気で修行して出家している人だというサインです。

だから、お坊さんは髪も髭も剃って、鉢を一個もちます。姿かたちもそれらしくなければならぬ。原則として、「私は釈迦の教えに従って、すべての仕事を放棄してただひたすら修行に邁進する人間です。したがって、なんの仕事もしておりません」と示す必要があります。そんな人が白くて新品の衣を着ていては信用してもらえない。

袈裟の誕生の歴史をとどめる痕跡

釈迦は、「仕事をしていないことを示すような着物を身につけよ」と言った。どんな着物か。当時、衣類というのは貴重品で、着物を着るのはお金がある証拠です。しかし、裸でいるわけにもいかない。そこで、道ばたに落ちている雑巾を拾う。他人が捨てた布を集めて、自ら糸でつないで、蓑虫の衣のような布をつくって体に巻く。恐ろしい姿です。これが釈迦さまの決めた着物です。

その汚い色を、インドの言葉でカシャーヤといいます。それが中国に伝わって、袈裟という言葉になります。お坊さんの着るお袈裟のもとです。本来的には仏教のお坊さんはその拾い物のボロボロの衣を着る。そうすれば疑い深い家庭の主婦だって納得します。頭も髭も剃って、汚い衣を着て鉢一つでやってきた。しかも立ち居振る舞いは、しずしずと歩いて、落ち着いた感じで立っている。ああ、この人は本物だ。

朝になって訪ねると、その修行者のためにご飯を炊いて待っていてくれる熱心な人もいます。昨日の残り物とか、場合によっては腐った物とか、不要になった物を鉢に入れてくれます。お坊さんは、1日ぶんの食べ物が集まると托鉢をやめて、一日一回のご飯を食べる。あとは、ほんらいの目的の修行に邁進する。これが仏陀の決めたお坊さんの生活の基本方針です。

日本のお坊さんも袈裟を着て托鉢するなど、その痕跡が見えます。お坊さんの着ている袈裟は、小さな布を繋ぎあわせたパッチワークになっています。いったん裁断してもう一度繋ぐという手間なことをしています。あれは、道で拾った物を縫いあわせましたということのシンボル化です。

仏教の基本理念とお坊さんの日常

仏教の基本理念を整理すると、次のようになります。

- ①超越者の存在を認めず、現象世界を法則性によって説明する。一神教とは違うのです。
- ②努力の領域を肉体ではなく、精神の領域に限定する。

心のなかの悪い要素が老病死の苦しみを生みだす。したがって、それを消す修行はすべて精神の内部に向かいます。肉体を使った修行はいっさいしません。日本の仏教は、滝に打たれたり、火の上を歩いたりする修行がありますが、釈迦の仏教は座るだけです。楽そうですが、精神は完全な集中状態にあります。

しかし、仏教の修行者があまりに体を動かさず、健康に悪いというので、お釈迦さまは弟子たちの健康法まで考えています。お寺に散歩場をつくり、そこを行き来する修行も考えています。ストレスをとるため、サウナを設ける規則もつくっています。スリランカやタイのお寺には、いまでもサウナがあります。いわゆる石風呂です。土の室の中で火を燃やして石を焼き、それを水に放りこむと蒸気が出ます。その状態でお坊さんが座るのです。

そのお風呂の習慣が中国、日本に伝わりました。日本のお風呂文化も、お釈迦さまが弟子を気遣う健康管理のなかから生まれたのです。古い銭湯の入口はお寺の屋根のような唐破風型だったりしますが、それはお風呂の発祥が寺だからです。古くはお風呂と湯屋とは別で、お風呂はサウナでした。京都では八瀬の釜風呂が現存していますね。

③修行システムとして、出家者による集団生活体制(サンガ体制)をとり、一般社会の余り物をもらうことで生計をたてる。

ここで初めてサンガが成立します。サンガという組織の生計基盤はすべて一般社会からもらうことで成り立ちます。この「もらう物」のことを布施とよびます。日本では半紙に包んだお金のことを布施といいますが、もともとのお坊さんはお金をもらっても、貯めても、触れてもいけないのです。

タイなどのまじめなお坊さんは、いまでもお金には触れません。日本でお会いしたタイのお坊さんは、「お坊さんになってから一度もお金に触れていません」と言っておられました。日本にくるチケットは信者さんが買って渡してくれて、日本に着くとまた信者さんが迎えにきて、電車やバスに乗るときは、その人がお金を払う。

デパートに買い物に行くことがあれば、財布をもった信者さんがついてくる。しかし、欲しい物があっても、「これを買ってください」と言うてはいけません。そういうときは隣の信者さんに、「このラジオを知ってください」と言う。信者さんは、「はい、知りました」と言う。奥の意味は、「私はこのラジオを欲しいということを知ってください」です。すると、信者さんはそのラジオを買って、それをお布施とするのです。

そのように、サンガは基本的に人から物をもらうことで成立します。自給自足もだめです。日本のお坊さんは、お寺の裏で畑や田んぼをつくって、それで精進料理をつくっている。仕事をしてはいけない仏教では、ほんらいは禁止事項です。原則はただ一つ、いかに集中して修行の時間をとるか、いかに集中して修行のエネルギーをそこに注ぐかです。

社会の好意に依存する修行僧の暮らし

私の研究分野は、お坊さんの法律、規則です。お坊さんが自分の口に入れてよい物はなんでしょうか。じつは、規則によれば、そのまま口に入れてよい物は二種類しかないのです。一つは、だれかが好意で自分の鉢に入れてくれた物。もう一つは水です。川でも池でも湧き水でもなんでもよい。これは好きなだけ飲んででもよろしい。口に入れてよいのはこの二つだけです。道端においしそうな物が落ちていたとしても、自分で拾って食べることはできない。だれかがそれを拾って「はい、あなたにあげます」と言って、鉢に入れてくれた物しか食べることはできないのです。

言いかえると、修行僧は一般社会の好意に完全に依存せよという意味です。そして、そのように100%依存して暮らすことでなにが手に入るかというと、自分のしたいことを100%追求する人生です。釈迦の考えた設計図のおもしろいところです。では、このような社会の問題はなにかというと、恒常的に社会からお布施がもらえるかどうかです。もっと言うと、お布施をもらうためにお坊さんはなにをするべきかという話です。

サンガの組織維持に欠かせない律

ここから組織運営の話になります。1,000人、2,000人で構成されるサンガで暮らすお坊さんが、日々のご飯を安定的にもらうには、どのような行動指針をとるべきかです。これも家庭の主婦の視線で考えなくてははいけない。

村はずれに大きなお寺がある。そこに100人のお坊さんが暮らしています。そのお坊さんたちが毎日托鉢にきます。ほかの宗教の人もきます。さあ、だれにあげようかと主婦が考えているときに、りっぱなお坊さんがやってきました。イケメンです。そうすると入れてあげます。次にまた仏教のりっぱなお坊さんがきました。次の人は、だらしなく口笛を吹きながら鉢をもっている。主婦はどう思うか。どうしようか、なぜこんな人にいいご飯をあげなくてははいけないのかと考える。「仏教のお寺って、りっぱな人もいるけど、だらしない人もいるんだ。この次からは別の宗教の人にあげましょう」、こうなりませんか。

社会に不信感を与えないように

社会の人たちが「こうあるべし」と思っているお坊さんの姿から外れた行儀の悪い、あるいは不道德な人がたった一人でもいると、サンガ全体に危険を及ぼすことになります。サンガの崩壊こそは、なにより避けなければならない。なにしろ、サンガが崩壊したら仏教が崩壊する。一人でもおかしい行動をしないよう、サンガの全員を縛る規律を設定する必要があります。

無茶な規律ではありません。一般の社会の人からみて、不道德な、行儀の悪い、仏教のお坊さんにふさわしくない行動を禁止しているだけです。この一線をクリアしていれば、あ

とはなにをしてもよいという最低の行動ラインを釈迦は決めているのです。この規則が「律」です。インド語ではヴィナヤ、意味は指導です。この言葉が中国に伝わったとき、お坊さんの規則だからと規則をあらわす律という漢字を当てました。

サンガはおそらく、世界史のなかでもっとも長く持続している組織です。2,500年続いている。お釈迦さまの時代にできて、いまでもそのまま生きていますから、おそらく人類史をとおしてもっともサステナブルな組織でしょう。そのサンガを支えている土台が、「律」という独自の法体系なのです。日本以外のすべての仏教国のお坊さんは、この律に基づいて暮らしていて、律なしでは生きていけません。日本の仏教だけは律がないので、日本では、律など見たことも聞いたこともないというお坊さんは、たくさんいると思います。

仏教はじつは利己主義の宗教

学問や医療などの仕事を「生きがい」にしている人は、じつは出家して修行しているお坊さんと同じ立場です。自分で選んだ、自分の好きな道を進んでいる人は、仏教の修行僧と同じ立場にいるのです。極端な例がビッグ・バンの研究者です。ビッグ・バンの研究が進んでも、世の中の人がその恩恵にあずかることはありません。ならば、研究の対価は社会からは一銭ももらえないはずですが、しかし、そのような人たちは社会から尊敬され、科学者として暮らせる。それは、サンガと同じシステムがあるからです。

仏教の修行僧は、他人のために修行しているわけではありません。仏教は本質的に、他人の役にたとうとする宗教ではないのです。自分の苦しみを消すために、自分の生き方をなんとかしようとするのが仏教です。本質的には利己主義の宗教です。しかし、そういう自己の目的に向かってひたすら人生を歩んでいる人の姿は、外から見ると魅力的で、かっこよくて、私もそのような人生を歩んでみたいと思わせるスマートさがある。

スマーター・ライフ。じつはこれが仏教の魅力です。このごろは社会貢献するのが仏教の本義だなどと盛んに言われているようですが、それは二次的な作用です。もちろん社会のためになにもするなとは言いません。ですが、その前に自分の人生を自分できちんとコントロールし、向上させなければいけない。それが周りの人にとってすばらしいモデルになる。あのような人生を送れば、私たちの苦しみも消えるであろうと思わせる。一種の希望です。そのような意味で、仏教のお坊さんは尊敬される。そういうお坊さんたちが生きる道が、律に基づくきちんとした日々の生活だということです。

犯すなかれ、盗むなかれ、殺すなかれ、嘘をつくなかれ

では、律とは具体的にどういうものか。まず日々のなかでしてはいけないことが約250条にまとめてあります。女の人には350条あります。お釈迦さまでも避けがたい2,500年前のインドの男女差別の意識のもとでは、どうしても女性を男性

よりも厳しく取り締まらねばならないという意識が働いて、このように決められています。

冒頭の4条だけご紹介しましょう。第1条、「僧侶はどのようなかたちであっても性行為を行なってはならない。行なったら永久追放とする。ただし、やむをえぬ状況になり、それを避けることができないと自覚した場合、緊急避難措置として『私は規則が守れない』と第三者に告げてから行なったなら無罪である」。じつはもう一文あって、相手は女性であっても、男性であっても、動物であっても犯罪になると書いてあります。

第2条、「他人の所有物を盗んだら、それが国家の法律によって厳しく罰せられるくらい価値の高いものであった場合には永久追放とする」。二度とお坊さんとして戻れません。ですから、10円、20円を盗んだくらいではこれに該当しません。

第3条、「人を故意に殺した者は永久追放とする。自分で直接殺しても、ほかの人を使って殺させても、あるいは『死ねば幸せになれるよ』などと嘘を言って死ぬことを勧め、その結果として死に至らしめても、すべて永久追放である」。

第4条、「自分で自覚もないのに、『私は悟った』、『悟りに近づいている』といったことを人に語り、あとになってから『じつはあれは嘘でした』と自白した者は永久追放である。ただし、そのときほんとうに自分が悟りに近づいたように思いこんでいて人に話し、あとでそれが思い違いだと気づいた場合は無罪である」。

律を研究することの醍醐味と意義

少し個人的な研究の話をしますと、私がこの律の研究をはじめたころは、第1条がネックになって、律を研究するやつはろくなやつではないというのが学会の雰囲気で、寂しい思いをしました。いまでは律研究は、しだいに仏教研究のメインになりつつあります。

律がなぜおもしろい研究材料なのか。第一に、法律は人間の集団がなければ適用できません。サンガという団体がなければ法律は適用されない。したがって、ある団体全体に共用される公的な情報だということです。

法律はある組織に1本は存在しなければいけないし、1本しか存在してはいけないものです。仏教が歴史的に変遷しながら分岐したり融合したりして、現在の仏教があるとしています。仏教が仏法僧の三つの要素を守りながら流れてきたならば、そこにはサンガの歴史があるはず。そのサンガにはかならず1本の律が付随しています。これをイメージするならば、生命のDNAです。DNAの変遷がわかれば、生命の流れ、生物界の流れがわかる。これと同じような意味で、律の歴史的変遷を調査することで、仏教全体の歴史的な流れもわかるのです。

そのような特性をそなえた資料は、律しかありません。一つひとつの思想的なお経や哲学書は、ある時代の人々がたまたまつくったもので、組織の流れには即応しません。その組織にかな

らずあって1本しかないという条件もありません。ですから、一つひとつの思想書を調べても、仏教の歴史はわかりません。

しかし、律をいろいろな側面から調べると、バージョンがいくつもある。ということは、すくなくとも仏教は複数の流れに分岐していたのです。失われたものもあるはず。古い遺跡で発掘した化石のような律もあります。そのようなものを総合的に扱って、律がどのように変化したかをたどると、サンガの分岐・融合の歴史がわかる。これが私の個人的な仕事の醍醐味です。この律を研究しているうちに、仏教は律に基づく集団宗教としての特質が強いことに気がつき、律研究にすっかりはまってしまったのです。

似て非なる仏教とオウム真理教

仏教とよく似た宗教で、教えに関してはほぼ仏教そのものという現代の宗教に、オウム真理教があります。麻原彰晃の教えに、私はほぼ納得します。人間にはさまざまな煩惱があって、悪い煩惱が業＝カルマという悪い力を生みだし、それがその人の人生、生まれ変わり、死に変わりに苦しみをもたらす。それを消す方法はただ一つ、自分の心のなかの悪い要素を消すしかない。それには修行だ。「修行するぞ、修行するぞ」と言った。

あの言葉は釈迦そのものです。しかも、麻原はやってくる人をだれでも受け入れた。出家したかったら仕事をやめなさいと言った。白い服を着てサティアンで——サティアンというのはインド語で真理という意味です。仏教を意識しているのは当然です。

そのサティアンでは、「いっさい仕事はしなくてよい。オウム真理教教団が養ってあげます。お布施で食べさせてあげますから、ひたすら修行しなさい。そうすれば精神のステージも上がるでしょう。そうなれば教団の上の地位について、ほかの人を指導する。そのような立場ですばらしい人生が送れますよ」と言った。「オウム真理教に入ったやつはばかだ」と言う人がいるが、私はそうは思いません。人生の苦しみを感じている人は、あのように勧誘されたら入信しますよ。お釈迦さまの時代に1,250人も人が集まったのと同じです。

ボアの論理と律

では、オウム真理教は仏教とどこが違うのか。なぜオウム真理教は殺人教団になったのか。教えの内容をいくら調査しても、答えは出てきません。

ボアという言葉がありますね。世の中にはオウム真理教に害を与えようとする悪いやつらがいる。ほっておくと悪いことばかりする。われわれに害になるだけでなく、本人にとっても害になる。彼らは悪い業を積んでいるから、生まれたあとも不幸だ。私たちは心優しく相手のことを思いやる人間だから、その人たちが悪いことを重ねて地獄に落ちるのを見ていられない。

かわいそうだから、いまのうちに殺してあげよう。そうすれば悪業を積む人生も終わりになるだろう。人を殺せば殺人者として社会的に逮捕されるかもしれない。しかし、それは相手のことを思っている人助けだから、自分の身を犠牲にしてもあの人を殺してあげよう。これがボアの論理です。

オウム真理教事件のときにマスコミなどがずいぶん取りあげてみなさんも、「ボアなんて邪悪なことを言って、とんでもないことを考えるやつらだ」と言っていました。

法治主義をとらない出家組織は暴走する

じつは、同じことは仏教のお経にも書いてあります。ずいぶんあとの時代の密教のお経の一部に、「菩薩の道として、悪業を積む者を自分の身を犠牲にしても殺して止めてやる」と書いてある。しかし、だからといって密教が殺人集団になることはありませんでした。ということは、教えに問題があるのではなく、オウム真理教の組織運営に問題があったということです。オウム真理教と仏教とを比べて明白なのは、オウム真理教には律がなかったことです。してはいけない最低ラインを決めた客観的な法律がなかったのです。

では、オウム真理教の人たちはなにに基づいて自分の行動を決めていたのか。教祖の麻原彰晃の個人的な命令や思いによって決められていました。麻原彰晃は、「われわれは修行する身なのだから、殺生してはいけない」と言っていた。だから、サティアンにはゴキブリがいっぱいうろうろしていた。しかし、ゴキブリは殺すなど言ういっぽうで、坂本堤弁護士一家を殺せと言った。殺してあげたほうがよいと。一人の人間の思惑によって、人の行動が恣意的に決められる体質だったのです。

公平に適用される律の存在が 2,500 年の礎

いっぽう、仏教には、客観的法体系としての律があります。この律は個人的な思惑で変更不可能な規律です。法律です。法律の利点は、すべての人間に客観的に適用されうることです。名目上、相手が王さまであろうが貧乏人であろうが、法律は平等に適用されることになっている。この律がなかったオウム真理教は、麻原の時々の個人的な思惑で動く教団になったのです。

仏教では、律によって人を殺してはいけないと決められている。法律に書いてあるから、どんな場合でも、どんな状況であっても、どんな人でも殺してはいけない。ボアだのという屁理屈はいっさい通用しません。仏教のお坊さんは、たとえ安楽死であろうが他人の命を絶つことに関わると僧団から追放です。

いまの日本では、脳死がどうだ、安楽死がどうだと、死に理屈をつけて考えようとします。しかし、法治主義の仏教は、どんな理屈であろうと人の命を絶つ行為に関われば、殺人者として排除します。戦争は、場合によっては殺人を正当化します。死刑も殺人を正当化します。社会的な状況が変えるのですが、仏教は社会的な状況とは無縁の法律に基づいていますから、人の死に関われば殺人になります。お坊さんを裁判

員にして殺人事件を扱わせたら、お坊さんはどんな事件であろうが死刑判決に賛成しません。賛成した瞬間に僧団から永久追放になるからです。

仏教のお坊さんは、この律があるおかげで、どんなことがあっても殺人に加担しません。「人に手を上げてはいけない」とも書いてあって、いっさいの暴力が法律違反なのです。

焼身自殺するお坊さんたち

じつは、仏教には戒と律という、二つの違った規律があります。日本では戒律と一言で表現して混同していますが、この区分は重要です。戒は、自己の行動を正しく制御するための基本的な戒めのことです。原則として罰則は伴いません。在家者、出家者のそれぞれに規定されていて、道徳に相当するものだと考えてください。一方の律は、出家者とくに比丘、比丘尼が集団生活を送るうえでの生活規範で、国家の法律に相当します。しかし、日本では律が法律であるという認識は失われ、日本の仏教にあるのは戒だけです。

だいたい前のことですが、お坊さんがミャンマーの軍政府に反対の声をあげて大行進したことがあります。衣を着たミャンマーのお坊さんたちはただ歩くだけで、シュプレヒコールもあげません。戒律に「荒々しい声をあげてはいけない」と書いてあるからです。だからお坊さんはただ歩くだけで、それを一般の人たちが守るように行進する。

そういうお坊さんが、政治的な対抗措置をとる最後の手段は焼身自殺です。人に手を上げて、声も上げてはいけないとなれば、自分で死ぬしかないのです。自殺は戒律で禁じられてはいません。ですから、自殺はお坊さんの最後の手段です。なぜ焼身かはわかりません。おそらく、お釈迦さまの時代から、もっともよい人の葬り方は火葬だとされてきたからでしょう。人の魂は煙とともに天に昇れば幸せだという思いからでしょう。

仏教の出家とオウム真理教の出家

修行だけして暮らしたい人たちは、どうやってご飯を食べるのか。オウム真理教と違って、釈迦は世間の人からの最低限の施し物で命をつなぐ方針を示しました。このやり方は、一般社会とのあいだに軋轢を生みません。これがすばらしいところです。

仕事をしないでご飯を食べようとすれば、一般の人たちの反感を買ったり、場合によっては潰されたりします。それを回避する方法として、釈迦はぎりぎりの暮らしで余り物をもらう方法をとった。仏教が2,500年続いたいちばんのポイントです。

これに対して麻原は、一般社会の余り物をもらうのではなく、「こちらから手を伸ばして一般社会にある財、資産をとってこい、奪え」と言った。その強奪の方法として合理的な方法を考えて。出家したい信者さんがくると、その信者の全財産をオウム真理教に寄付させるという条件で出家させるのです。

オウム真理教が問題になりはじめたころ、大阪弁護士会の山

下瀬先生によられました。まだオウム真理教が殺人教団だとはみんなが知らないころです。私も知らなかった。行くと、弁護士がいっぱい並んでいる。お母さんらしき人も涙を流しながら座っている。「佐々木さんはオウム真理教って、知っていますか」、「名前は聞いています。さかんに勧誘していますから」。

あまりにも違うサンガとサティアン

お話をきくと、オウム真理教は、信者になって出家したい人はその全財産を教団に寄付せよと言う。そうして出家すると、道場の中に閉じこめて外に出さない。困るのは家族です。家や財産のすべてを寄付して家族が一文無しになる。取り戻そうとオウム真理教に行き、「夫に会わせてください、子どもに会わせてください」と頼んでも、「彼は静かに修行したい、会いたくないと言っています」と門前払い。路頭に迷う人も出てくるなど、とんでもない被害者がたくさん出た。そこで裁判にかけるといことで、弁護士が関わってきたのです。

オウム真理教側の言い分は、「これは古代からのお釈迦さまの教えにのっとっています。仏教のやり方でなにも問題ありません」というものでした。そのオウム真理教の主張がほんとうかどうかを確かめるために、私がよばれたのです。

律に基づく、ぜんぶ嘘っぱちです。まず財産ですが、仏教では、信者の財産にサンガはいっさい関与してはいけないことになっています。出家したあとに自分の財産をどう処分するかは、信者さん自身が決めます。お寺に寄付するならもらいます。しかし、ああしなさい、こうしなさいとはいっさい言えない。

「道場に入った家族と会えないのですが、仏教では、出家した人は二度と社会の人とは会えないのですか」。これもとんでもない話です。拝観料をとっているお寺は別ですが、仏教のお寺は事実上、24時間オープンです。お寺は苦しんでいる人を受け入れる場所ですから、門を閉めるはずがないのです。

律をとおして絆を大切にサンガ

サンガでは、托鉢で自分の実家に寄ることはむしろ奨励されていました。出家した息子が毎日くるとなれば、お母さんは朝にお弁当をつくるのと同じで一所懸命つくりまわります。子どもが一日一食しか食べられないなら、栄養をつけなくてはと、ごちそうを入れます。お釈迦さまは、「それはよいことだ。そうやって毎日ご飯が食べられれば、時間をかけて托鉢しなくてもすむ。1軒でご飯を食べてさっとお寺に帰って修行する。それは出家の目的にかなう」。こうですから、ちっともかわらない。

そのように、仏教では出家した人は家族といつでも会える。家族が病気になればお坊さんを一時休業して、家族のもとに戻って介護することも認めています。むしろ勧めています。

オウム真理教は、お釈迦さまの教えに従っているふりをし、実際の運営面では自分勝手な方向に捻じ曲げて、社会からお金を強奪する方向に向かった。その結果、被害者の会が

団結してオウム真理教を訴えた。そのリーダーが坂本弁護士だったのです。それが邪魔だから殺す。あとは犯罪の連鎖です。

最終的に国との戦争になって、サリン事件ののちに壊滅する。この間わずか10年たらず。仏教は2,500年続いています。組織の要は、お題目ではないのです。その組織の人間がどのような働きをして生きているのか、その組織の運営こそがサスティナブルかどうかの分かれ目なのです。

現代の出家者としての研究者

世の中には利益のため、稼ぐための仕事だけでなく、これをやりたいから生きているんだと追究している人もいます。生きがいとして、なにかに向かって人生を賭けている人はたくさんいます。その代表が科学に携わる人たちです。そのような思いで生きている人には、サンガの基本理念は極端ですが一つの手本として意味があると思います。してはいけないことが現れてきます。科学の世界をサンガに対応させると、こんなことがいえるでしょう。

①真理追究の人生を、お布施によって実践する。

お布施というのは、たとえば科学研究費だったり教授のポストだったりします。宇宙物理学の佐藤勝彦さんに、「佐藤さん、あなたはお布施で暮らしていますよ」と言ったらすごく喜んで、「そうなんです、私はお布施で生きる身です。だからこんなにすばらしい、楽しい人生を送らせてもらっています」とおっしゃっておられました。

②情報共有体の形成。

これがサンガに相当します。古代仏教の時代は一緒に暮らさなければならなかった。なぜなら、そのころは文字がなく、情報伝達の手段は言葉しかなかったからです。釈迦の教えを受け渡ししながら同じ生活スタイルを守るには、どうしても一緒に住む必要があった。先生から弟子への教育は、顔をあわせないと不可能だったがゆえにサンガができた。

いまは遠く離れていてもよい。しかし、ある程度の共有体が必要です。情報共有体です。過去の業績を知らずして先端は拓けないから、どうしても一つの社会が必要です。その遠隔的につながった社会を一つの社会とみるならば、その社会をどのようにサスティナブルにするかという課題が生まれます。

③独自の律が必要です。たとえば、1) 研究費の個人的流用は重罪にあたる。永久追放です。2) 論文の捏造、盗用は重罪となる。3) 研究活動をなまけることは重罪になる、などなど。

お布施で暮らしている人間としての義務

仏教のサンガの律は、一人ひとりが独立して暮らしていれば必要なかったが、集団が社会に依存して暮らす形態から必然的に生まれてきた法律です。もし純粋科学の世界も社会からのお布施で保たれているならば、そこにはかならず律が必

要です。これだけはじめに、しっかりやっていますという姿かたちを見せなければならない。

お寺が24時間門を開いているのもそれです。いつでもきてください、いつでも見てください。いつ見られても、私たちは恥ずかしいことはなに一つしていませんということを示す。集団がお布施をもらうかわりに自分たちの誠実さを示すという義務を果たしているのです。同じことが科学の世界でも問われます。お布施をもらって研究をしなかったら、それは重罪です。

④世間にこびて客観的態度を崩すことは重罪です。

あるところに、とても明るくて人に好かれるお坊さんがいました。信者さんから、「うちにきてください」とひっぱりだこです。あのお坊さんと話をするとおもしろい、愉快だし気さくなお坊さんだ。それに比べて、こっちのお坊さんは修行だといって座ってばかりでちっともおもしろくない。明るいお坊さんをひっぱりこんで遊んでいるうちに、お坊さんも慣れてきて一緒にゲームをしたりする。チェスかなにかをしたんでしょう。

それを見たお釈迦さまはなんと言ったか。「これはけしからん」。世俗に媚びて、世俗の生活にあわせるように自分を変えたら、出家した人間の価値がなくなります。評判を落として、そのサンガは崩壊します。社会にあわせて媚を売って、科学的な真理を捻じ曲げるようなことをしてはいけません。やはり、社会の目を意識して自律性のある規則をつくることは大切です。

自浄作用としての律の精神に学ぶ

律という規則は罰を与えますが、与える主体はサンガです。自分たちの組織から律に違反する人が出てくれば、その組織が自主的に罰を与えるシステムになっています。このシステム自体が、社会からの信用を得ます。自浄作用をそなえた組織だからです。

自分たちで規律をつくり、その規律を客観的にだれにも公平に適用してきたことは、仏教サンガの清潔さを証明するものとしてとても強いファクターです。これが2,500年のあいだ仏教教団の信用を保ってきたいちばんのポイントです。とうぜん同じことが、科学などの現代的出家組織に適用されるはずで

出家者を支える社会を再構築する時代

私は、もとは科学をやっていたから、いまでも科学に憧れがあります。科学の領域にいる人をほんとうに尊敬しています。いまの日本は経済的に右肩下がり、そのような出家者を支える力がしだいに薄れています。目の前の役にたつことしかお金を出不ない風潮がしだいに強くなりつつあります。

しかし、そんなことでは、ほんらいの人間らしい社会は生まれません。社会に依存しながら自分のしたい道を貫く階層は、社会には必要です。イノベーションは、そのようなところからしか生まれないからです。ふつうの生活に慣れ親しんで、

みんなと同じことをやっている人から、とんでもない発想や新しいものは生まれせん。新しいものは、そのことだけに精力を注いでいる人たちから生まれます。しかし、そのような人たちは、世の中で生活する能力は乏しいのです。そのことを社会が認識して、だいいな人材であるとの認識のもとで、そういう人を支える風潮が大切です。

異質な価値観の人たちが導くイノベーション

いま日本が衰退しているのは、世界に通用する新しいものがなくなったからです。どこにでもあるものしかつくっていない。そういう日本はこれからどうするか。日本からしか買えないものをつくる。これしか日本が経済的に復興する道はありません。

新しいものを生み出すのはだれか、それは世俗にはない価値観をもっている人たち。現代社会の出家者です。いまの社会のどこにそのような出家者がいるか、この人はほんとうの出家者だろうか。そのことをいつも考える。そして、長い目で支える価値がある人たちをだいいに支える。そういう社会的風潮が必要です。そうでないと、みんながそこそこの暮らしをしながら、しだいに衰える社会になってしまう。

では、あなた自身がそういう社会から必要とされる人材になるにはどうするか。私は次の三つが大切だと考えています。

①「考える時間」を確保する。

② 学ぶための努力を惜しまない。

③ 世俗的欲望から離れた「努力目標」をもつ。仏教でいうなら、自己の精神的向上をめざすことです。

そして、もっとも避けるべきは、「自己を中心にした不合理な思考」です。

そのような意味で、釈迦の考えた人の生き方、組織の生き方は、いつの世においても新しい価値と指針を与えるものだと、私は信じています。

第13回安寧の都市セミナーA

2012年4月14日 京都大学医学部杉浦ホールにて

ささき・しずか●1956年、福井県に生まれる。1979年に京都大学工学部工業化学科を卒業後、京都大学文学部哲学科仏教学専修を卒業。京都大学大学院文学研究科博士課程を単位取得満期退学。米国カリフォルニア大学バークレー校への留学をへて、2002年から現職。文学博士。専門は、仏教哲学、古代インド仏教学、仏教史。日本印度学仏教学会賞（1992年）、鈴木学術財団特別賞（2003年）を受賞。おもな著書に、『犀の角たち』（大蔵出版、2006年）、『日々は修行』（筑摩書房、2009年）、『ゴータマは、いかにしてブッダとなったのか』（NHK出版、2013年）などがある。